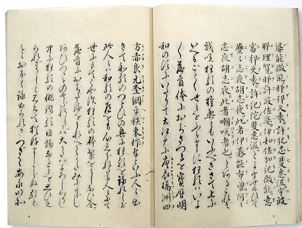
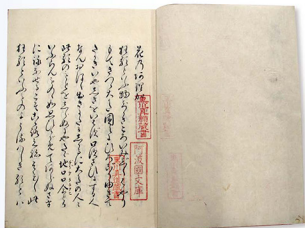


『花廻阿理加』



函架番号 G-151。写本 1冊。縦 22.6cm×横 16.4cm。袋綴。墨付 20丁。1面 9行。楮紙。金茶色無地表面紙。外題(左肩・打付け書き)「花廻阿理加」。内題「花乃阿理加」。蔵書印「阿波國文庫」「黒川真頼蔵書」「黒川真道蔵書」。奥書「文政十三年(注1)二月のはじめつきた 阿波國旭櫻園のあるじ瀬部春根しるす」。

著者の瀬部春根(六根園春根、春暁、旭櫻園)は、阿波國徳島辨裏の人。本居大平の門人で(注2)、狂歌は六樹園飯盛(宿屋飯盛、石川雅望)門である。

本作は、狂歌の風体の乱れ、落首体を憂い(注3)戯歌・俳諧歌・狂歌は元来異なるものではなく、和歌から出たひとつ物であることを、歌学書『和歌肝要』『古来風鉢抄』等を拠り所に説く。また、狂歌の沿革を永正・慶長元和・宝暦明和・安永と時代を追い、作者たち

を挙げて論ずる。英甫永雄と豊蔵坊信海の詠歌、生白堂行風による撰集の「夷曲」の称を難じており、師の六樹園の言に筆を及ぼすところもある。さらに、和歌・戯歌・俳諧歌・狂歌のありようを朝顔の花色・形の変化に擬えて述べ、「ざれうたのころの色を人とはゞ たなかはりたるあさがほの花」と結んでいる。

春根の携わった撰集に、阿波・淡路の作者の詠を採輯した『阿淡狂歌百人一首』(六樹園撰・春根書・岳亭定岡画、天保3年(1832)刊)(注3)がある。この巻末には『花能阿理加』を含む計8点を掲げた「旭櫻園主人著述書目」が付されている。

(注1) 1830。(注2) 『国学者伝記集成』に拠る。

(注3) 国立国会図書館蔵。